2018年11月10日

老子会会報

老子会　主催
第012号

老子会のモットー

「老子の道の精神を生かし、自分を変え、世界を変え、未来を変え、世界平和を構築し、人類の幸福を推進していく」ことをモットーとする。

第５６回老子会から

第５６回の老子会は2018年10月20日(土)15:00～17:00甲南大学６－３３講義室で実施しました。『老子』第７１章を勉強しました。

原　文

知不知上、不知知病。夫唯病病、是以不病。聖人不病、以其病病、是以不病。

書き下ろし文

知りて知らずとするは上(じょう)、知らずして知るとするは病(へい)なり。それ唯(た)だ病を病とす、ここを以(も)って病(へい)あらず。聖人は病あらず、その病を病とするを以って、ここを以って病あらず。

現代語訳

自分がよく理解していてもまだよく解っていないと考えるのが最善であり、よく解っていないことを解ったつもりになってしまうのが人間の欠点である。そもそも自分の欠点を欠点として自覚するから、それを改善することもできる。このように「道」を知った聖人は、自分の欠点を欠点と素直に認めて改善しているからこそ、欠点の無い聖人でいられるのだ。

解　釈

この章は、「知る」ということについての議論。自分が知っていることであっても、知ったふりをせず、自分の欠点を欠点としてはっきりわきまえる。欠点は欠点としてはっきり自覚すれば、それは欠点ではなくなるのだと述べている。

そもそも人間の知識や理解というものは「知っている」と「知らない」の二元論で語れるものではなく、「なんとなく解る」程度の知識の方が圧倒的に多いであろう。しかし拙者を含め、人間はその「なんとなく解る」をいつのまにか「よく知っている」と思い込みがちに変わってしまう。だから常にそういう人間の心理が持つ欠点を自覚し、自分が知っていると思っていることでもまだ知らないと考える方が良いと老子が話していると私は考える次第である。

『老子』第三十三章にも「知人者智、自知者明：人を知る者は智なり、自らを知る者は明なり…人を知るのは智者に過ぎないが、自分を知るのは最上の明とすべきことだ」という言葉があって、「知」と「明」というところを老子は明確に区別している。

知っていて知らないとするのが最上であり、知らないのに知っているとするのは欠点である。聖人は欠点を欠点とするから、欠点が無いのである。

知らないことは知らないと言える人は正直な人だから、他人にも自分にも正直な人である。賢人は、たとい自分の専門分野で既知のものであっても、初心で謙虚に捉えることができる人である。

釈迦に説法のような話をされても、知ったかぶりせず聴く耳を持つ。ところが、知らないのに知ったかぶりをしたりして、自分の妄想を真実のように平然と話す人がいる。

知っても知らないと思うのは良いね。知らないのに知っていると思うのは良くない。賢人には欠点が無い理由は、自分自身で欠点を欠点として理解しているからである。欠点を欠点としていたら、欠点は無い事になるのである。つまり、この章で「知ったかぶりはダメだ」という事が大切だと感じた。

「無知の知(むちのち)」という言葉は、古代ギリシアの哲学者・ソクラテスの言葉である。外見は整っているわけではないが、彼の明るさ、親しみやすさ、ユーモアのセンス、誠実さなどが、聞く者の心を魅了して離さなかったそうである。

「無知の知」の本当の意味は、「何が一番大事な事なのか、何が真理なのか」ということについては、私も、彼らも、ともに分かっていない。分かっていない、というのは同じである。ところが彼らは、分かったつもりでいる。しかし私は、分かっていない、という事を自覚している。とすると、私は、自分の「無知」を知っている、という点では彼らよりも知恵者であるらしい。

この章は大変短い章であるが、誠に重要なメッセージを送っている。「知らぬことを知る」ということである。「中途半端に知っているつもり」ということは大変危険なことである。知っていてもまだまだ知らないことだらけであるとして、自省・自戒する者は上根の人である。

自分で分かったと思ってもまだまだこれでは不十分だとするのが最もよく、良く分かっていないのに知ったかぶりをすることは甚だ良くないことである。このように自分の短所あるいは不十分なことを自覚することが大切である。このようにすればこの欠点も欠点でなくなる。従って聖人と言われる人はこの点を十分理解しているので欠点がないのである。その欠点を欠点として自覚しているからなのである。そのために問題点を持つことが無いのである。

雑感

「知って知らざるは上なり」、インテリぶっている人は肝に銘ずる言葉である。何事もすべては知っているが、世間に対しては、何も知らないような態度をとっているのが最上である。

老子・荘子の「悟り」とは「**知りて知らずとするは上なり**」は少し分かり難いであるが、続く「**知らずして知るとするは病なり**」を読めばよく理解できる。いわゆる「知ったかぶり」が多いことを戒めているのであろう。

知っていても知らないと思うのが最上である。知らないのに知っていると思うのは欠点である。

聖人は欠点がないのに、欠点を欠点とするからである。そもそも欠点を欠点とするからこそ、それだから欠点がないのである。

「知りて知らず」知っていても知らないというのは、「道」について言ったもの。道は無限であり、たとえ知ったとしても、それは道のほんの一面にすぎない。ただし、これは一般論として理解することもできる。

「自分は分かっていると思っても、知らないふりをしなさい」と言っているのではない。真実というものは本当に奥が深くて、或ることに「なるほど」と納得できても、すぐ次にはでは「これはどう考えればよいのだろうか」といった疑問が湧いてくるものである。

科学の本質はものの道理（宇宙の真実）を客観的に明らかにすることであるが、或る一つのことが科学的に明らかにされても、その途端に新たな疑問が生まれるものである。新たなどころか、もっと大きな、多くの疑問が湧いてくるものなのである。

だから、老子の言う「知りて知らず」とするのは、世間が好む「謙遜」ではないのである。**真実とは「納得」の連続によって少しずつその人に見えてくるものである**、という真実を示しているのではないだろうか。このようなことは全ての学者に対し、「謙虚になれ」と語っているようである。

また、「不知（ふち）を知れば上（じょう）、知（ち）を知らざれば病（びょう）」というのは知の限界を悟るのが真の知であり、知の限界を覚らぬのが迷妄（めいもう）である。知識を広げることは大切であり、何事も知らないよりは知っておくに越したことはない。しかし、知っているからといってそれが偉い訳ではない。「俺は知っている。お前は知らないのか。お前バカだな」のようなことではいけない。知識は一つの方便（道具）に過ぎなく、それを使って何を考え、どう行動するかが肝要なのである。

勉強をすることで私たちの知らなかった世界を知り、古今東西の知識と智恵を学ぶ。そして実生活では何事にも「観察」することを怠らずに、社会がどういうものなのか、自分は何をすべきなのかを考え続ける。これを「洞察」と言う。知識としての学びと、日常の観察力・洞察力をリンクさせることを心がけていくうちに、よりよい生き方、正しい生き方というものがあるとすれば、その正しい生き方を目指す。これが「自分を磨く」ということである。老子会の方針である。

老子会の『人』和泉屋 巧さん

和泉屋さんは生まれも育ちも東大阪。旧河内市英田（あかだ）村で生まれました。有名な「花園ラグビー場」の近くです。

小学校６年生のとき、お父様が御病気でお亡くなりになり、お姉さん、妹さんの３人のきょうだいを、お母様が女手一つで育てられました。

ご家族はとても仲が良く、現在も皆さん近所で暮らしています。

中学を卒業し、地元「花園高校」へ。もっぱら帰宅部で自由な青春を謳歌されました。

卒業後は公務員として「大阪府庁」に採用となり、実に４５年間勤続。主に土木関連の職務に従事、道路、河川をはじめ、府営住宅の整備など、大阪府民のためのインフラ向上に尽力されました。

結婚後は、２人の娘さんの良き父として、時に厳しく？大切に育まれました。お２人とも近所に住んでおられ、今は奥様といっしょに「おじいちゃん、おばあちゃん」として３人のお孫さん（女の子ばかり４歳、３歳、０歳）の「おもり」に奮闘されています。きっと、写真以上に「目を細める日々」なのでしょう。

御年６８歳の和泉屋さん、大半はボランティアとの事ですが、知人友人の求めに応じて、何かと世話をしたり、様々な相談事を引き受けるのが仕事と仰います。「時には嫌になったり、しんどい時もある」とも仰いますが、根っから「人間が大好き」とのことで「誰からも愛され、尊敬され、信頼される存在に！」を自身のモットーとされています。「破顔一笑」笑顔いっぱいの和泉屋さん。勉強会・懇親会でお会いできることを、楽しみにしたいと思います。

＜老子会の皆さんへ＞

大人になると、自分のスタイルが決まってきて「自分を変える」のモットーを実践するのが、なかなか難しいですね。しかしながら、それを乗り越えて日々少しでも精進し、お互いに此の会で胡先生から学んだ「老子」思想を人に伝え、体現していきましょう。最近、血圧が高くなったり、目がかすんだり、年相応の悩みも出てきましたが、老子会の皆さんに負けないよう、長生きをして人の役に立ちたいと願っています。

（和泉屋 功）

「第56回老子会」のご報告

老子会の皆様には、いつもご協力頂き誠にありがとうございます。10月は甲南大学で17名出席の中、第71章を学びました。先生の講義の前に老子漫画第4話「老子の質問」をフリートークしましたが、理解を深めることができず司会進行役の藤田理事が苦慮しているようでした。これには会員各位の事前学習の機会が少ないこともありますが、私（石井）の案内不足にも問題があると深く反省しております。

石井　政　事務局長

【今後の日程】

１２月１５日（土）第58回老子会　午後3時～5時　國民会館（天満橋）

※終了後の懇親会は、天満橋「錦城閣」お楽しみの忘年会です。

【学外研修】

明年春に「せごどん九州（鹿児島）の旅」を計画しています。

日時：３月８日（金）夕方に大阪南港出発、同１１日（月）

早朝に大阪南港帰着（さんふらわあで船中２泊、現地１泊）

老　子　会

〒658-8502

神戸市東灘区岡本8-9-1

甲南大学　国際言語文化センター　胡金定研究室

電話: 078(435)2353

FAX: 078(435)2545

E-mail kokintei@center.konan-u.ac.jp